

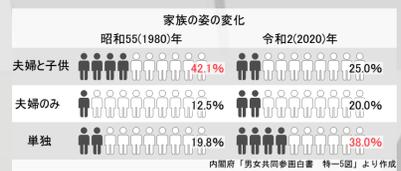
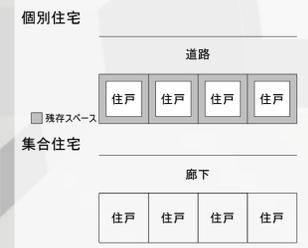
集まって暮らす

-Gather and Live-



■ 問題定義

従来の集合住宅と団地などの個別住宅は、個別住宅の場合、敷地境界線からの離隔距離確保など残存スペースが生まれ、敷地が有効に使われていない。また、下の図のように効率化された集合住宅の場合、共用廊下は単なる通行のために使われ、住戸間に交流ができるスペースを設ける余裕はない。このような残存スペースを有効に生かし、住戸間にゆとりのスペースを設けることで住戸間のコミュニケーションにつなげる。現在、核家族化や少子高齢化などが進み、家族の在り方が変わっている。内閣府の調査によると令和2年では単独世帯が一番多く割合を占めており、昭和55年時代から2倍になっている。家族単位の空間から個人単位への変化により、家族占有スペースから、家族間共用スペースが求められる。当計画は、人々の暮らしの形の変化、家族の新しい在り方の変化に対応する集合住宅の提案を行うことを計画目的とする。

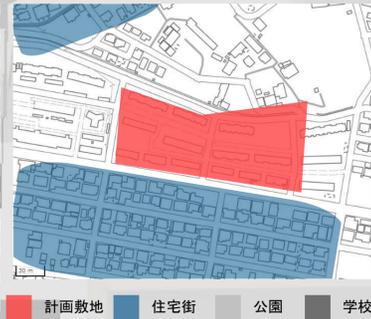


■ コンセプト

集合することによって生み出されるスペースを利活用し、周辺の住民、当敷地内の住民等とのコミュニティ形成につながる共用スペースを計画する。

- ①集合住宅の住民間の交流ができるだけでなく、集合住宅の住民と周辺住民との交流もできる計画とする。
- ②家族単位だけでなく個人単位の住宅を計画する。
- ③直接的なコミュニティだけでなく間接的なコミュニティを住戸間の空間を利用して計画する。
- ④住戸を一つのユニットとし、ランダムに設置していくことで、住宅の内と外にそれぞれ空間の隙間を形成する。
- ⑤全体は、一つの大きなブロックではなく、幾つかの住戸で構成したブロックを数カ所設け、それらを繋いで関係性を高め計画とする。

■ 計画敷地



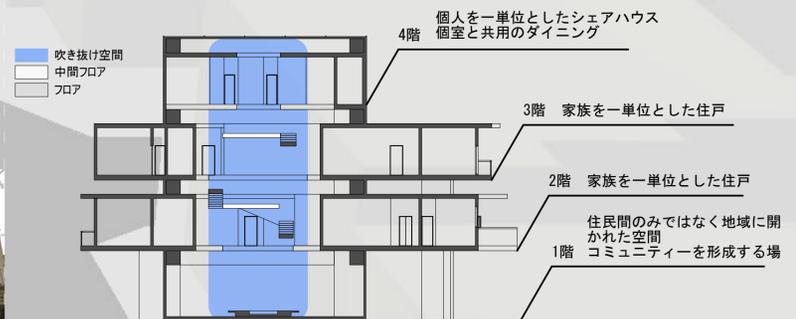
計画地は、広島県福山市引野町4丁目

選定理由としては、ケーススタディとして住宅街の一角にある市営住宅地を選定した。



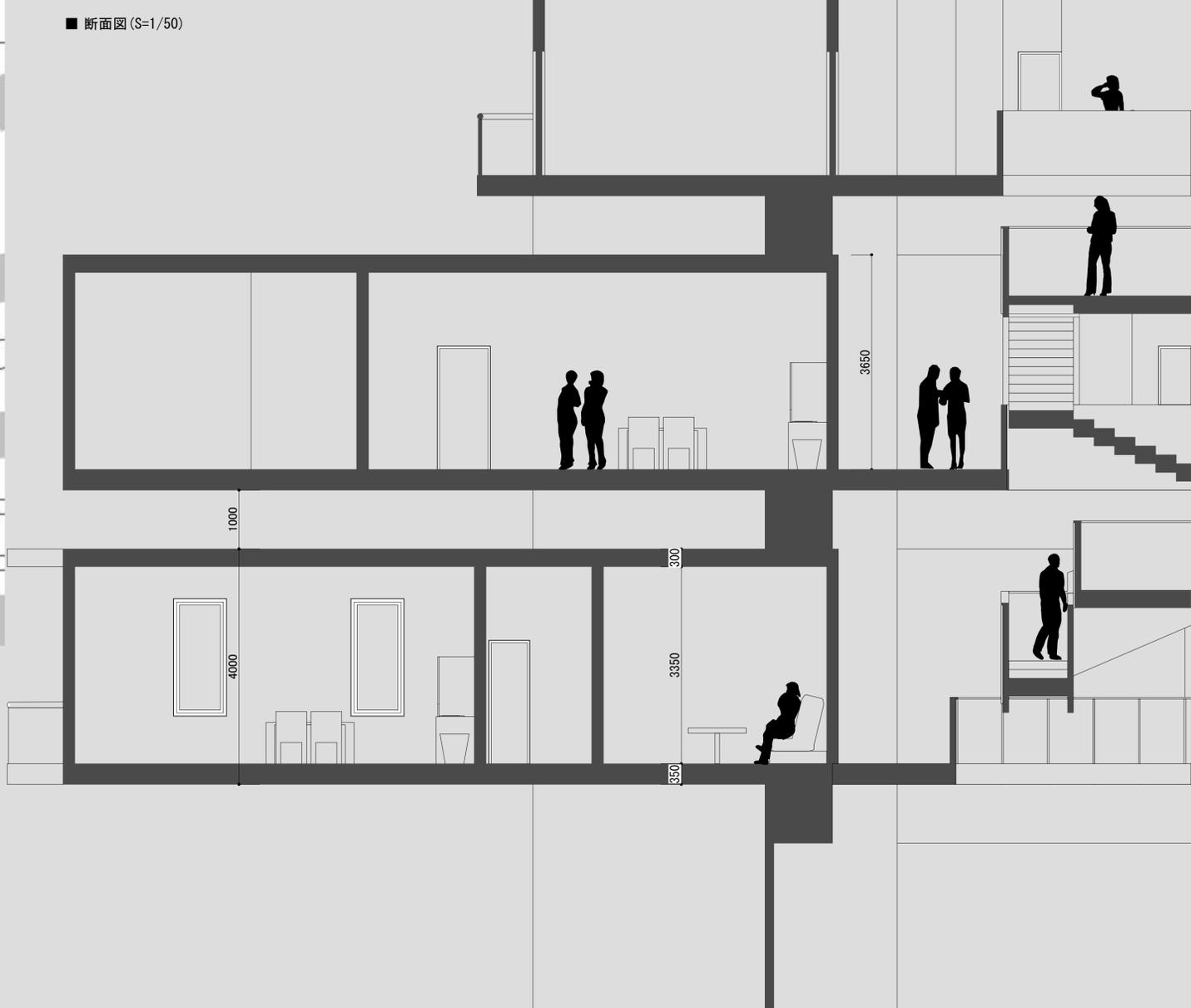
■ ダイアグラム

階数によって世帯の単位をわけ段階的に共用空間を設けるように設計しました。また、住戸は吹き抜けを囲むように配置されており、吹き抜け部分に中間フロアを設けました。これにより直接的なコミュニティだけでなく間接的なコミュニティを形成します。中間フロアは2-3階に1つ、3-4階に1つ中間フロアを階段で結んでいるが、4階はフロア自体が住戸の役割を果たすので、階段を設けず間接的なつながりのみとする。下の断面図のようにレベルを変えることで、他の階とのつながりを強くさせる。また、中間フロアそのものがコミュニティの場となる。





■断面図 (S=1/50)



配置図 S=1/500

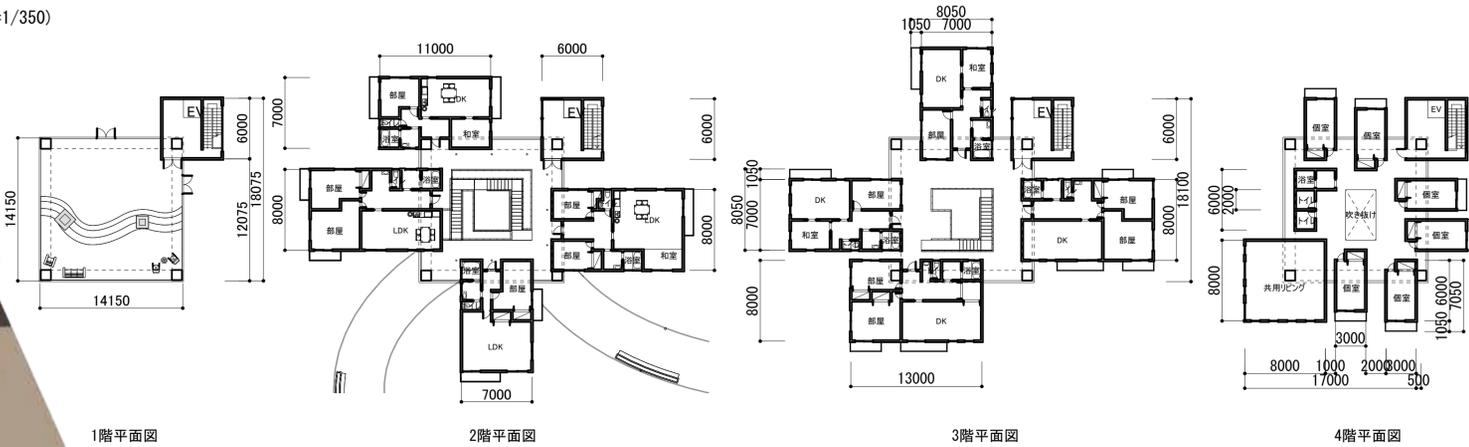
住居者以外の地域の人でも利用できるような外部空間とする。敷地の四隅にポケットパークを設けることで、地域の人々が敷地に入りやすく近隣住民とのコミュニケーションが生まれやすくなる。住宅間にコモンスペースを設けることにより住民の交流の場となる。

また、住戸の上でできた空間に緑を設け親しみやすい空間を形成する。内部空間と外部空間のつながりは主に1階とコモンスペースが担う。1階は住戸がなく四方すべてがガラスであり外から視覚化できるようなになっている。このことから、建物自体が閉鎖的なものでなく開放的な印象になり、コミュニティの活性化が図れる。

また、廊下を住宅で囲っているが、ガラスで囲まれており住戸一つ一つが密接していないため、外の様子がわかりやすく生活の中で自然や四季の変化、人の賑わいなどを感ぜられる。



■平面図 (S=1/350)



渡り廊下は住宅と住宅の間を縫うように配置されている。また、2、3階に設けているが、すべての階に同じように配置せず住戸を差し込むときに生まれた空間に設けている。下図のようになっており、一つの住戸に2F,3Fにそれぞれ一つ以上の渡り廊下を設けている。

6つの棟のつながりを持たせるように渡り廊下でつなぐ。渡り廊下をつなぐことで、違う棟の世帯とのつながりを促す。

また、渡り廊下には植栽を設けるとともに休憩やコミュニティの場となるようなベンチを設けている。

